

# ある野心

有森信二

わたしの手の部品をはずす  
わたしの足の部品をはずす  
わたしの首の部品をはずす  
わたしの頭の部品をはずす  
わたしの腹の部品をはずす  
それらはひとりにならず  
わたしに近い牛になる

# 雨

たくましい腕を空が  
かすめとってしまつたので  
なにもかも  
かたつむりになる

# 一頁

兜の下  
洗われたばかりの首が  
空つ風にばかりの首が  
吹き晒される

## 抒情

吠えすぎた犬  
連帯とは  
紙屑

菌ぎしりの後の  
バンジージャンプ

## 覚醒

まわりくどい夜がきて  
上からのぞいたら  
化石した時間が  
点々と点々とこぼれ  
真白い入口付近に転げ出た  
ピラミッドがひしゃげていた

## 氷河期

すずめが松の枝で  
虫を食っていた

てっぺんから  
飛行機が落ちてきた

そのとき  
魂と魂がぶつかった

## 秋

電車の中で  
流れる風景が  
ふいに  
舌を噛み切ろうとした

# 明るい昼

昨日からの細い雨は  
音もなく降り続いてる

昼食時はとうに過ぎた  
というのに

まだ二階の二人は  
涎を流し  
眠りこけている

蛇口から滴り落ちる水は  
すっきり  
洗面器を満たしこぼれ

それにしても  
めっぽう明るい昼である

昼食時はもうとうに過ぎた  
というのに

二階の二人は  
昨夜の激しく狂おしい  
営みの果てに

それぞれの  
足と手とを縛り合い

一瓶の薬を空にし  
りんりんりんと走り  
ほうほうほうほうと上り  
るらるらるらと漂い

涎を流し  
こんなに明るい昼を  
眠り呆けている